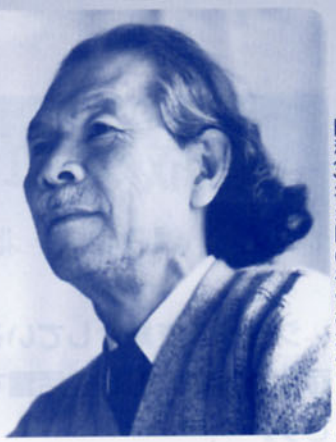
高度な陶芸の先駆者・松本佩山さん


昭和33年当時の初代松本佩山さん

有田では江戸時代より、やきもの作りは分業体制でしたが、一人で自分のやきものを作ろうと情熱を傾けた人がいました。初代「松本佩山（勝治）」さんです。

7月末の暑い日、第2代佩山（平）さん宅を訪れ、初代のことを、いろいろ尋ねました。（以下敬称略）

私（久富）が冗談まじりに、初代は「いかつい（厳しい）方でしたネ」と話をもちかけましたら、2代佩山は「いやいや風貌はそうだったが、実に優しい父でした。」とのこと。2代佩山が「小さい頃は子煩悩でしたネ。家では私（2代）が大将でした。風邪で発熱すると、つききりで看病してくれました。また童話をよく聞かせてくれました。やさしくて情が細やかでしたよ」と。そして歴史上の人物をよく話してくれました。とのことでした。

初代は明治28年（1895）上幸平で生まれています。すごい読書家で、記憶力が抜群でした。

また、太田耕人先生に俳句を、そして易学も勉強していました。と話されました。

でも私（2代）が大きくなり、一緒に仕事をするようになってからは、「師弟関係」に変わりました。

私が、やきもの作りを始めた頃、どうすれば良いか全然教えてくれないのです。「自分でやってみなさい」。こちらが壁に突き当たっても手を出さないのです。どうにもならない状態になって、はじめて何故そうなったかを教えてくれました。「体で覚えろ」が教育方針でした。

石炭窯で焼成の頃、青い炎が窯の中で充満し危険な状態になりました。そのとき湯呑一杯の水を窯の中に振ったのです。煙突より黒煙がモウモウと出て正常になりました。これには驚きでしたネ。

色の出し方、釉薬についても幾度となくテストを繰り返し調合の割合をコンマ以下まで記憶していました。化学に強く、研究旺盛でした。また不要になった道具類も捨てず、これを活用する手だてを考えていました。

話は変わって、初代佩山のもとで働いた野口惇さん（79歳、中の原）によれば、墨弾きは特殊な方法で絵付けする独特のものだったし、やきもの作りの小道具も自分で考え作られました。「蘭の花」絵など見事なもので戦争中、工栄社顧問をされていた頃に化学磁器（ボービン）を開発されました。と話されました。

また、池田満さん（75歳、山内）は、初代佩山より荒仕（あらし）子から窯焼成まで一人で出来て、一人前だ。釉薬や絵付については工栄社時代に指導を受けたとのこと。そして初代は鳥の絵など今にも生きて飛び立つ感じでした。

そして「芸術家たる前に職人たれ」とよく申されていました。お酒が大好きな方でしたネ。と。

初代は2代佩山と共に仕事をするようになってから、中国宋時代の古陶磁を研究し、木の葉天目、油滴天目、釉裏紅、辰砂などを研究、その釉を作りあげるために気の遠くなるように試験をくりかえされたとのことでした。

昭和36年（1961）自宅の庭に立ち、仕事着で朝焼けの空を見上げながら、「おーい平（たいら）（2代佩山）今日は釉薬かけに持ってこいの日だぞ！はよう仕事着に着換えんか！」と声をかけられたのが最後でした。「おれは、仕事着で死んだら本望」と言っていましたが、そのとおりなりました。脳出血でした。と。

（久富　桃太郎）

めも

初代佩山については、山本康雄氏「反骨の陶芸家・佩山」に実に詳しく紹介されています。このほか有田町史・通史、陶芸、陶業IIで、更に「池忠の皿山遠景」「おんなの有田皿山さんぽ史」でも紹介されています。平成13年2月・佐賀市図書館で「松本佩山」展が一ヶ月間開催されました。

季刊
皿山
2004 秋 No.63
有田町歴史民俗資料館・館報

平成の皿山職人像

濃(だ)み職人・北川敬子さん

シリーズで紹介している職人さんですが、第三回は濃み職人として活躍する女性、北川敬子さんです。

北川敬子さん

有田焼を作る仕事で、女性が最も活躍するのは絵書きの段階です。それも染付・下絵での濃(だ)みという作業は伝統的に女性が受け持ってきました。そのため「濃(だ)み娘(こ)」という呼び方もあります。なぜ女性が主流となるのか、今回取材した深川製磁株式会社の深川泰・窯芸本部長によれば「女性の根気強さと感性がこの仕事に適しているのでは」とのことでした。

デザイン室の山口千鶴子さん（56歳）が描く図案に濃みを施すのは伝統工芸室の北川敬子さん（52歳）です。北川さんが用いる濃み筆は20センチほどの竹の軸に、長さ約8センチの鹿の毛を束ねたもので、毛の束の直径は5センチくらいです。絵書き用には腰の強いイタチやタヌキの毛の筆が使われるのに、濃み筆に限って鹿なのは、毛の縦と横に穴があいていて水含みがよいからだそうです。

山口千鶴子さん

ところで筆には特二、大、中などの種類があり、描く部分によって使い分けますが、広島の業者から一本5千円ほどで購入します。

まず、呉須という顔料を水で解いて溶液を作りますが、この時に、お茶を1カ月ほど置いて腐らせておいたものを使います。これだと「絵具となじみが良い」と北川さんはいいます。『日本陶磁大辞典』によれば「茶に含まれるタンニンの作用で溶液が沈殿せず、呉須の分散効果を狙ったもの」とあります。

濃みの方法は筆の毛先に溶液をたっぷりと含ませ、溶液をためながら素焼きした器に描かれた線書きの中をムラなく染めていきます。この作業を「ハスの葉の露を転がすように」と表現する人もいます。たとえば葉っぱなどを描く場合、葉先の薄い色合いを出すところから葉の付け根の濃い部分へと筆を進めます。

窯で焼いて初めて青い色が出るのですが、濃淡だけで染付の絵としての立体感を出すのが、濃み職人としての腕の見せ所です。その手法は付け濃み、石垣濃みなど文様の出し方や色合いによって分類されます。

山口さんが思い描く模様を、北川さんが濃みで表現する形で製品が出来上がります。北川さんはこの仕事を始めて30年ほどの熟練者ですが、それでも窯から出てくるまではどのような色合いになるか、不安になるといいます。その反面、思い通りの発色だと仕事にもハリが出るといいます。

昭和5年ごろの深川製磁・絵書き座風景

しかし、今でこそ椅子に座っての仕事ですが、以前は一日中畳に座りっぱなしでした。北川さんにとっても同じ姿勢を崩せないのが苦痛ではありますが、焼き上がりごとに足りない部分を研究し、努力する北川さんと、デザインを練りあげる山口さんのコンビで伝統の技が後世へと引き継がれていきます。

有田の街の移り変わり

～陶祖「李参平」400年祭に向かって～

◎「李参平」陶祖祭

今年6月「山王祭」がありました。西光寺横の雌猿が、上有田・冨右衛門横の雄猿にデートする12年毎のお祭りです。次回は李参平400年祭と同じ平成28年で賑やかな年となりそうです。

これまでに李参平300年祭が大正5年（1916）に行われ、その記念に「李参平記念碑」が大正6年に完成しました。その頃の有田は、第一次世界大戦後の復興期で輸出好調、碍子の需要が旺盛でした。

有田焼創業350年記念式典（挨拶をする当時の青木類次有田町長）

次に昭和41年（1966）に、350年祭がありました。泉山に「先人陶工之碑」が、事業費3170万円で建設されました。ここには4つのカプセルが埋設されており、12年後の李参平400年祭に2つのカプセルが開封され、残り2つは500年祭に開封されます。この記念碑が完成した頃は3C（クーラー・カラーテレビ・カー）とマイホーム時代で、有田の陶磁器業界も好調でした。

12年後の陶祖400年祭も好調であってほしいものです。

その為には、時代の流れを読み、消費者のニーズをしっかり確かめることが大切です。今から12年後を目指して行動を起して丁度良いのではないでしょうか。

◎有田の街の移り変わり

有田内山を中心に述べますが、李参平一族、宗伝一族が軌道に乗せた寛永年間（1624～44）には、人口2千人程の街でした。ところが窯の燃料・赤松の伐採で山が荒れ826人の陶工が追放されます。

ようやく有田の街が落ち着きを戻した頃、文政11年（1828）大火があり1647軒が焼失し、有田内山は壊滅状態となります。

その後、有田の街はオランダ貿易で勢いをつけながら明治維新となります。

明治の有田は、明治9年に異人館、10年香蘭社、11年製磁会社、21年有田貯蔵銀行（現・佐銀有田）25年協立銀行（現・佐銀有田駅前）、28年有田徒弟学校、29年桂雲寺で第1回陶磁器品評会、30年有田駅開業と年を追うごとに活気を帯びてきます。

ところが、昭和3～7年に内山地区道路拡張工事が始まります。これで有田の内山は大きく変化します。

昭和3年から7年の道路拡幅工事（現在の佐賀銀行有田支店前）

この拡張工事のために、全面的に建替えたのが銘品堂・深川製磁です。次に後背地が川であるため後方へ移動できず建物の前面が削られ、改めて玄関、展示室を設けたのが辻絵具店・庄健さんなどです。前庭があった為、そのまま残ったのが今泉今右衛門さん、そのほか道路の左側（西に向かって）の建物は後方へ曳かれています。

昭和初期の内山は窯元・赤絵業・商社が並び、更に金屋・絵具屋・筆屋・釉灰屋など陶磁器関連の店そして床屋3軒・風呂屋5軒・ちょうちん屋・人力車・劇場など賑やかな街でした。

◎活きている街づくり

街には、それぞれ個性があります。個性を形づくるものとして、①有田は谷あいで、冬は厳しく、猪や狸も出てくる自然的要素　②白壁土蔵など伝統的建物・記念碑・陶製説明板など人工的要素　③388年の陶磁

器の歴史、伝統、行事など先人陶工への感謝を込めた人間的要素です。このような諸要素が組み合わさって、個性豊かな街となり、私達は素晴らしい有田の街を次世代へ遺してゆく責務があります。

◎これからのまちづくり

有田へ来訪される方は、自動車かＪＲです。来訪された方に、町民一人ひとりが、心を込めて「ようこそ有田へご来訪くださいました」と笑顔で挨拶することです。ＪＲ有田駅、上有田駅には、観光スポットの地図を掲示し、チラシを置いておきます。観光スポットを多く作る、これは幕の内弁当と同じです。弁当には卵焼きをはじめ多くのたべものが入っています。それを味合いながら満足する。これと同じで見処を沢山作って、散策しながら、町内に休憩する場所を提供することで、やきものの里に感動していただくことになります。

◎いま有田でやるべき「まちづくり」

有田町内には、黒牟田・応法・南原・本町など、それぞれ歴史的建造物を中心に個性のある街があります。その地区に住む人々が知恵を出して新しい街起しをすることです。佐賀県では「まちづくり活動支援制度」を作り、地域住民の発意と計画を支援することになりました。（7／24朝日）更に国税庁では相続時に歴史的建造物については、評価額に対し控除割合を30％軽減することを決めました。（7／24日経）このような制度を活用することです。

更に、有田町内で宿泊者を増やすことも考えるべきでしょう。現在、年間宿泊者数は4千人と聞いております。武雄市が55万人、嬉野町が115万人です。有田町に泊まって「ろくろ座」「赤絵座」などで、やきもの造りに励んでいただくことも配慮すべきことです。

食べものでは「ごどうふ」「鯉こく」など有田ならではの料理を楽しんでいただき、食事に供された器が気に入れば、食事をした店で、それと同じ器を購入できるように展示する。

やきものも21世紀にふさわしい「用即美」の器を追求して、消費者の要望にこたえてゆく。

このようにして、有田に訪れる人々に、やさしく、心の安らぎのある街として、知力と感性のある街として、まづは12年後の陶祖李参平400年祭に向かって、町民が一丸になって取組むことが求められていると考えます。

（久富桃太郎）

夏休みの資料館

町屋模型作り教室を開催

有田町内山地区は国の伝統的建造物群保存地区に選定され、毎年数軒ずつの町屋の補修事業が行われています。

そこで、未来の有田を背負っていく子供たちに町屋の模型を作ることによって、伝統ある有田の建物を再認識してもらい、大切にしてほしいという趣旨のもと、8月16日・17日の二日間、今年で4回目となる町屋模型作り教室を開催しました。

今年は有田小学校から本島沙希さん、山下湧介くん、朝重裕譜くん、草場卓人くん、永尾狩立武蔵くん、永尾狩立権くんの6人と、有田中部小学校から小林祐大くん、藤本昴くん、中山宏志くん、太田伸くん、豊村有貴くん、岩永浩実くんの６人、計12人が参加しました。

カッターを使うため、多くの参加者を受け入れることができないのが悩みですが、毎回受付と同時に定員に達するほどの人気です。

最初は悪戦苦闘のこどもたちでしたが、段々慣れてきてあっという間に数軒の模型が完成しました。また来年も開催する予定ですので、５・６年生の皆さんはぜひ参加してみてください。

季刊『皿山』

通巻63号（平成16年9月1日）
編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒844-0001　佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678　FAX0955-43-4185